

『芥川賞全集』

首藤 静夫

最近「何でも読もう会」のネタが乏しくなった。過去の国内有名作家は一通り読んだ。新しい作家は肌が合わない、外国の長編は骨がおれる。

そこで出たのが芥川賞作品を順に読むアイデア。手頃な分量だから読みやすい。

文藝春秋社の『芥川賞全集』（以下、全集）。今日まで十九巻が出ている。古い巻をパラパラ覗いて見る。受賞第一作は石川達三『蒼氓』で一九三五年だ。氏のように受賞を機に大成した作家は多いが、消えていった作家はもつと多いだろう。各巻の受賞者を見ると、有名作家が多い巻、殆ど無名ばかりの巻と色々だ。

庄巻は第五巻。五味康祐、松本清張、安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫、庄野潤三、遠藤周作、石原慎太郎、近藤啓太郎、菊村到、開高健、大江健三郎……。これだけの作家が一九五二〜一九五八の間、順に受賞している。

芥川賞は、予選を残った七、八作品から偉い先生方の審査で決まる。この全集には委員全員の審査後感想があり、そこだけでも嬉しい。

第五巻の審査委員は丹羽文雄、舟橋聖一、石川達三、瀧井孝作、佐藤春夫、川端康成、宇野浩二、坂口安吾の各氏でいずれも辛口だ。人により評価が大きく異なるように、誰と誰がこの作品に賛成したが私は最後まで反対したとか、僕はいつも舟橋君と意見が違うが今回は珍しく一致した（丹羽）とか、前回該当者なしなので今回はみんなで目をつぶって賛成したとか、臨場感あふれる。

新人の一発受賞は少なく（近年は知らないが）、何回かは佳作で様子見だ。吉行淳之介、庄野潤三、川上宗薫の各氏などは佳作止まりの常習で、そろそろというので合格したのが吉行、庄野氏ら。川上氏は最後まで落選、そのうち純文学から〇〇小説に転身して大成した。

諸先生の批評に耐えてきた吉行氏らが、次には審査委員の仲間入りをし、同じように辛口の批評をしている。以前自分を落とされた先生方と一緒に審査する気分はいかがであつたらうか。「読もう会」が楽しみだ。